

望月昭先生 追悼記念文集



AJHS



- 1 森山哲美・・・対人援助学に命をかけた研究者
- 2 武藤崇・・・追悼にかえて：著書を語る『応用行動分析から対人援助学へーその軌跡をめぐってー』
- 3 渡辺修宏・・・「行動福祉」の登場とその功績
- 4 立花周太・・・恩師、望月昭先生を偲んで
- 5 岡綾子・・・望月昭先生を偲んで
- 6 川原義彦・・・望月先生との思い出
- 7 中妻拓也・・・望月昭先生を偲んで
- 8 荒木穂積・・・重度障害者の対人援助と望月昭先生
- 9 高山仁志・・・望月昭先生の言葉はあとからきいてくる
- 10 橋本名津雄・・・思い出に生きる望月昭先生
- 11 荒堀弓子・・・望月先生に宛てて
- 12 鈴木史織・・・京都のお父さん
- 13 藤健一・・・望月昭先生の研究室
- 14 星野祐司・・・望月昭先生を偲んで
- 15 片山詩朗・・・望月昭先生との握手
- 16 長谷川敏子・・・望月昭先生を偲んで
- 17 矢藤優子・・・望月昭先生の思い出
- 18 嶋津雅彦・・・望月昭先生の思い出



対人援助学に命をかけた研究者

We will all miss Dr. Akira Mochizuki dearly.

森山哲美(常磐大学)

Tetsumi Moriyama (Tokiwa University)

望月昭先生ご逝去については、武藤崇先生と藤健一先生から私宛に送られてきたメールで知りました。私にとって掛け替えのない望月先生（以下、望月さん）にこの空蝉でお会いすることができなくなったと思うと残念至極です。

私は多様な場面で望月さんと行動を共にして多くを学びました。彼の行動の特徴は、他者への思いやりと優しさ、そしてエネルギッシュな研究活動です。彼が示した他者への配慮は、儀礼的なものではなく、他者が置かれている状況と他者の行動を熟視し、その行動の理由を沈思熟考したうえでの支援でした。その人となり対人援助学会の設立につながったのだと思います。

彼から対人援助学会への加入を勧められて私は加入しました。しかし加入はしたものの、私は無精でほとんど学会に参加したことがありません。そのため望月さんは、ご自身と武藤崇先生とで編纂した『応用行動分析から対人援助学へーその軌跡をめぐってー』（晃洋書房）で対人援助学を学ぶ機会を私に提供してくれました。

感謝のメールを差し上げたところ、望月さんからすぐにメールで返事がありました。そこには、自分が障害者当事者になるとは思っていなかった、考え方が変わるかもしれない、メール入力もままならないほど病気が進行したため短文で失礼、という文章が簡潔に記されていました。事態は極めて深刻だったにもかかわらず、その文章は、私への配慮とご自分の病気を前向きにとらえようとしていることがうかがえるもので、まさに望月さんらしい文章でした。

望月さんにはもっと長く生きてほしかった。対人援助の視点と実践方法について彼ともっと深く議論したかった。そのような思いが募るばかりです。望月さんの御冥福を祈りつつこの拙文を彼への感謝の文とします。望月さん、ありがとうございました。

追悼にかえて：著書を語る『応用行動分析から対人援助学へ —その軌跡をめぐって—』（望月・武藤, 2016）

武藤 崇（同志社大学心理学部）

『応用行動分析から対人援助学へ—その軌跡をめぐって—』（望月・武藤, 2016）は、望月先生のご退職に際して、望月先生の代表的な論文7篇のアンソロジー、そして各論文に対する対談（武藤との）を収録（ただし、武藤による編集が施されている）したものである。

本書編纂の契機は、退職の前年に、望月先生から「退職に関する行事や退職記念号の企画はすべて辞退するつもりだ」という意向をうかがったことであった。おそらく、そのようなご意向を固めたのは、望月先生が「進行性の難病（神経性内科系）に罹患し、運動機能全般が減衰してゆく」（本書の「はじめに」の i）ことを気にされてのことによるのではないかと推察された。そうであるならば「今からすぐに始められること」は何かないだろうかと考え、本書の企画を思いついたわけである。そして、幸運にも、晃洋書房が本企画を快諾してくださったこともあり、何とか公刊することができた。

各論文をめぐる対談は、月1回2~3時間程度、半年以上続いた。7つの著作についての対談は、公刊の古い順に行われた。それは、望月先生の研究の「軌跡（各論文のつながり）」を描くためであった。7回の対談を終えてまず驚かされたことは、望月先生が「自力で考え、自分の手を動かし、論文として世に問い、そしてその応答を基にまた自力で考える」というサイクルをずっと続けていたことであった。しかも、その方向性は、時代の趨勢や業界の風潮に抗うこともいとわな、まさに（やはり）「ラディカル」なものだった。

望月先生の考える「対人援助学」とは何か。その鍵となる概念は、行動分析学、障害、そして「一人ひとり主義（あるいは二人称）」と言えるのではないだろうか。是非、本書を手にしていただき、改めて望月先生のヴォイスを聞いていただくと幸いである。

「行動福祉」の登場とその功績

渡辺修宏（国際医療福祉大学）

Appearance of "Behavioral Welfare" and its achievements

WATANABE Nobuhiro (International University of Health and Welfare)

ソーシャルワークとはつまるところ、「人と環境との相互作用」に焦点を絞り、そこで生じる問題の予防や解決を図ることです。ここでいう「問題」を「生きづらさ」と言い換えると、よりわかりやすいでしょうか。

その援助対象者が患う病・障害がゆえに、あるいは、その対象者を取り巻く環境がもたらすさまざまな影響によって、その対象者の「生きづらさ」が生じます。決定的な要因によってそれが起こるといふより、さまざまな要因が相互作用しあった総体的結果として、「生きづらさ」が規定されるのです。その「生きづらさ」をソーシャルワーカーたちは、「生活動作の不自由さ」、「対人関係構築・維持の困難さ」、「就学・就労困難さ」、「生活困窮」、場合によっては「生命維持の困難さ」と呼称して、それらの予防、解決、あるいは低減を試みているのです、援助対象者とともに。

さて、望月昭先生が用いた「行動福祉」という概念は、「人の環境との相互作用」のわかりにくさ、曖昧さを打破してくださいました。つまり、その人のその場面のその「行動」と、その行動を取り巻く「環境」との相互作用を捉えるという、より具体的な焦点をお示ししてくださったのです。

もちろん、事はさほど単純ではなく、援助対象である「人」を「行動」に置き換えることに抵抗や反論を示す方は少なくありません。しかしそうであって、その「行動」の総体はその「人」になることを否定できる方はいません。そして、「人」を細分化したその「行動」らを1つ1つ改めていくことがソーシャルワークの目的達成への接近になることもまた、揺るぎのない事実なのです。

この場をお借りして、対人援助理論と技術に大きな発展をもたらした望月昭先生の功績をかみしめつつ、あの日の先生の笑顔を思い浮かべながら、あの日の先生のご指導に、心から御礼を申し上げたいと思います。

—支えるべき人を今、目の前にした時、なにをみるのか？

—それは、その人の行動と、その人を取り巻く環境と、それらの関係である。

恩師、望月昭先生を偲んで

2016年応用人間科学研究科修了生 立花周太

望月先生のご霊前に、心からの哀悼の辞を捧げます。

2021年9月末に、私の近況を伝える手紙を先生に宛てて差し出させて頂きました。その後、同年10/1に先生がご逝去されたとの知らせをサトウタツヤ先生のFacebookにて聞きました。追って、私の手紙が到着したその日に先生が他界されたとの報を、先生の奥様よりお手紙で頂きました。

先生にはご迷惑ばかりかけ、このようなことを公の場で申し上げるのは恐縮の極みですが、陰ながら先生を私の二人目の父だと思い続けておりました。立命館大学文学部3回生の時に先生のゼミに入り、応用人間科学研究科M2修了までの4年間、公私に渡って多くのご指導・ご助言を頂いて参りました。今の私があるのは先生のご指導・ご助言の賜物と思っており、先生がお亡くなりになられたことが残念でなりません。

諸事情あり、5年間勤めた前の職場を離れ、今私は就労移行支援事業所に福祉サービス利用者として通所する身となっています。まさに、就職先に向けて「これがあればできる」を表現する当事者となっています。今の私を先生がご覧になったら「おいおい立花くん大丈夫かなあ・・・でも、立花くん自身が『これがあればできる』を表現するまたとないチャンスだし、頑張ってみなさい」と仰って下さるのではないかと誠に勝手ながらに思っております。

2008年に先生がお書きになられた故富安芳和先生に宛てた追悼文「○から×へ：富安芳和先生を偲んで」は私が支援者・当事者として生きていく上でのバイブルと思っています。先生が下さった数えきれないほどの○、そしてこれから私が手に入れていくであろう○、それらをお土産にいつか先生の所にご挨拶に上がり「でも、あの時は×でした！」と胸を張って報告できるよう、不肖の弟子ながら今後も精進していきますので、どうか大目に○としてください。

望月昭先生を偲んで

岡 綾子

就実大学教育学部

望月先生には立命館大学大学院応用人間科学研究科でご指導をいただきました。社会人学生として、臨床経験は積めども思弁が不足した状態で大学院に飛び込んだ私は、研究指導では望月先生に毎週毎週本当によく叱られました。望月先生は「久々に（何を言われても大丈夫な）サンドバックができる人が来て嬉しいよ」と笑顔で仰っていました。一方、私は叱責の中に込められた望月先生の行動分析学や特別支援教育への揺るぎない哲学にいつも新たな学びがあり、また社会人学生故にメンタルは丈夫だったこともあり、この厳しい指導に強化され続け、指導時間はどんどん長時間に及ぶこととなりました。

この指導の中で、望月先生は支援において障害のある個人が主体となり、その個人の行動レパトリー拡大のために固有な方法（援助・援護・教授）を見出すことの大原則について常々お話をしてくださいました。今日、それを忘れることなく日々の実践や研究を行うことができているのは、この時のご指導の賜物ではないかと大変有難く思っています。

私が大学院に在学していた時期から、望月先生は「自転車でこけた」「バランス悪い」「脳がなんかあるぞ」と仰っていましたが、お住まいの地域の運動会にも参加される等、前向きに過ごしておいででした。本格的な治療を開始されてからも、新薬の研究に参加され「俺の方、絶対うどん粉だ」と仰ったり、「買い物はヘルパーさんに頼めば、ってみんな言うけど、選ぶ楽しみってもんがあるじゃない？」と仰ったりと、いつもユーモアたっぷりに接してくださいました。しかし、お会いする度に症状が進行していかれる望月先生に対して私にできることは、これまで先生から学ばせていただいたことを実践や研究に活かしていくことだけでした。もっと望月先生から学ばせていただきたかったのに、本当に残念でなりません。これから出会う、支援を必要とする子どもや大人に、適切で過不足ない支援をしていくことで望月先生への恩返しをしたいと考えています。

私が博士号を取得した時、大学教員になった時、立命館大学文学部心理学専攻での最終の「応用行動分析学」の講義を担当することになった時、望月先生は折に触れて「立命館で学んだ意味を忘れるな」と仰っていました。毎回必ず「勿論です！」と返答しましたが、私の現在の実践や研究が、望月先生のお考えを過不足なく満たしているものとなっているかどうかは未だに確信は持てません。しかし、常にその言葉について考えながら、今後も実践や研究を進めていきたいと思えます。

望月先生のご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。

合掌

望月先生との思い出

Memories with Dr. Mochizuki

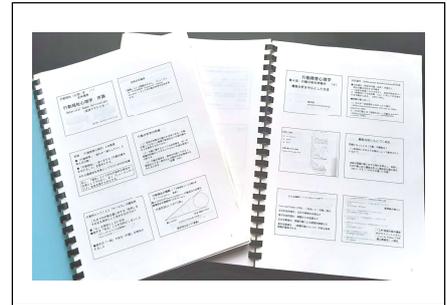
川原義彦（対人援助学会事務局）

Yoshihiko Kawahara (Secretariat of Science for Human Services)

2003年立命館大学学部4回生の時に『行動福祉心理学』

今までに聞きなれない講義科目に惹かれて選択し、はじめて望月先生と出会いました。その当時に頂いた講義プリントは今も私の宝物として大切にファイルをしています。

『行動福祉心理学』とは障害を持つ個人に対するヒューマンサービスの研究・実践のための新しいパラダイムとして先生がお考えになられた造語です。



『行動福祉心理学』では個人の行動に注目し、それを随伴性という枠組みで捉え、行動成立に必要な環境設定を検討する必要があるとも述べられています。また、対人援助実践におけるスタンスをどのようにとるか、あるいはどのような手順によって進むことが最も効果的で機能的であるのかという一連の行動過程を通じ、生きる権利を有した人格に対する畏敬の中、人間の科学的な行動原則に着眼しなければならないと語られ、ひとり一人が個々の独立した人格体として、その存在を社会的に認められるよう個人的なマイクロレベルな援助から社会的なマクロレベルの援助・援護に向けた社会的構築に取り組まなければならないという先生の考えは今日の対人援助学会の基礎になっているのではないかと私は思っております。

大学院では先生のクラスターに入り2年間多くのことを学ばせて頂きました。常に人の話に耳を傾け、様々な研究テーマに対しても肯定しながら研究を深めるための指導をしてくださる先生でした。

2008年対人援助学会を創設するにあたり、先生はこれまでの研究や経験の集大成を表現する場であるかのように尽力をつくされました。年次大会のポスター発表を先生とふたりで見ている時、「社会的援助システムが構築され、誰もが当たり前に関われることができる社会が来るといいね」と話されたことが心に残るひとつの思い出となっています。

ある日の学会打ち合わせの帰り道、先生とふたりで校内を歩いていた時に「君には伝えておく、大変な難病におかされている」と打ち明けられました。あまりの突然のことでショックと驚きでうなずくことしかできず、先生と別れ校門を出た瞬間、大粒の涙か溢れ出てきたことを今も覚えています。病状が進行され大学を退職されお会いする機会がなくなり、今回突然の訃報を聞いたとき言葉に出来ないほど悲しみが溢れてきました。

産学連携研究をはじめ大学院校友会の初代会長への推挙や対人援助学会事務局を任せて頂けるなど、様々な機会に恵まれたのは先生のお力添えがあったことで、今も感謝はつきません。

望月先生、本当にありがとうございました。心よりご冥福を心より祈り申し上げます。GiveではなくGetすることを胸に留め頑張って行きます。

望月昭先生を偲んで

立命館大学 衣笠リサーチオフィス 中妻拓也

私が望月昭先生と関わらせていただいたのは立命館グローバルイノベーション研究機構の研究員としての半年、客員研究員として1年の計1年半と非常に短い時間であったため、このような形で追悼記念文を書かせていただくことは僥越かと思いますが、謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、先生との思い出を書かせていただき追悼とさせていただきますたく存じます。

私と先生の出会いは2014年8月でした。私の指導教員でもあり望月先生とも親交の深いサトウタツヤ先生にご紹介いただき、先生がプロジェクトリーダーをされていた第1期特定領域型R-GIRO研究プログラムプロジェクト「対人援助学の展開としての学習学の創造」の研究員としてのプロジェクトに携わらせていただきました。その頃の私と言えば非常勤講師で食いつなぎ、日々の生活に追われ、研究と疎遠になりかけているころでした。そのようなタイミングでいただいた望月先生の下での活動はとても充実した刺激的なものであり、私の研究への見識を変えてくれるものであったことを覚えています。

研究員・客員研究員として、Café Ritsでの活動(学生ジョブコーチによる障害のある個人(生徒、成人)におけるキャリア支援)や毎週金曜日のミーティング、望月ゼミの博士課程前期課程院生の研究支援などに様々な活動に関わらせていただきました。どれも充実した思い出なのですが、私の中で特に記憶に残っているのは、プロジェクトの活動中や先生との昼食も兼ねた打ち合わせなどにおいて、望月先生がぼそっと口にもされるお言葉でした。

一例を挙げるなら、昼食時に私の研究テーマである「共感」の概念についてどの様に捉えられるかを相談していた際に「熟年夫婦のような、湯飲みを出せばお茶が注がれるような関係は共感の要因も見出せそうで善く見えるのかもしれないが、これは結局ディスコミュニケーションでもあるように思うな」という、共感のネガティブな機能の可能性に気づかされたお言葉であったり、研究の打ち合わせ時に私が当時行っていた共感研究のレビューの行き詰まりについて相談した際には「君は神にでもなるつもりかな」というお言葉をいただき、手あたり次第すべての共感研究を網羅しようとしていた私の浅慮さに気づかされたこともありました。

いずれもつぶやくようにおっしゃられた言葉ですが、私の中に深く刺さり、その後の研究に関する考え方や着眼点、発想の転換点となったことは言うまでもありません。

また、望月先生が事あるごとに口にもされていた、「他立的自律」という相互支援的な考え方は障害のある方の就学支援の観点のみならず、日常における人間関係をとらえ直す観点としてとても印象的に思い出されます。院生の研究活動の補助の時に「他立的自律」の精神を念頭に、院生の研究活動を促進させるための環境整備や、院生から支援や援助を要請しやすい関係性の形成などを心がけ支援を行っていた経験は、今も人間関係の形成や促進、他者支援活動の際の発想の根幹となっています。

私は現在、期せずして望月先生が立ち上げと運営に尽力されてきた「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」の事務局にて業務をさせていただいています。

研究員時代に研究や治験での倫理観について望月先生にお教えいただき、議論したことが現在の私の業務に活かされており、とても不思議な縁を感じています。

研究員時代、研究予算の執行など事務作業を行う時などに「これも修行だと思って」とお声がけいただくことがありました。今回も望月先生が「修行だと思って」と導いてくれたような思いがします。望月先生のご恩に報いる意味でも誠意尽力したいと存じます。

望月昭先生 本当にありがとうございました。先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます

重度障害者の対人援助と望月昭先生

荒木穂積（立命館大学名誉教授）

望月昭先生と私は、ほぼ同時代の人間である。私は 1949 年生まれで、望月先生は 1950 年だから 1 年先輩になる。立命館大学への赴任は、1990 年で、望月先生より 8 年早かった。21 世紀を挟んで、人間科学研究所（2000 年設立）ができ、翌年応用人間科学研究科（2001 年開設、2018 年人間科学研究科に再編）がスタートした。以来、定年退職までご一緒させていただいた。望月先生は初代の応用人間科学研究科長（2001 年～2003 年）および人間科学研究所所長（2004 年～2011 年）として先頭に立って仕事をされた。

望月先生と私は同じ心理学専攻であるが、応用行動分析学と発達心理学で研究方法論は異なっている。しかし、研究対象はともに障害者支援であった。望月先生の前任地は、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所で重度障害者を対象にした研究に携わっておられた。大学院時代に幼児を対象とした観察学習も先輩と定期的に行っておられたと聞く。私も大学院時代に、重症心身障害児施設第一びわこ学園で嘱託の心理判定員として 5 年間働いたことがある。その後、平安女学院短期大学附属幼児教育研究所で 12 年間障害児保育のフィールドで実践と研究に携わった。

重症心身障害児や幼児の行動分析や発達診断をすすめるためには「極微の世界を解明する」ための労力、時間、経費が必要である。第一びわこ学園に勤めはじめたときに岡崎英彦園長（当時）から、「がんばりすぎなで、ながく勤めてください」と言われたことが今も鮮明な記憶として残っている。気長さと粘り強さが求められる。望月先生は、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所に 15 年間勤務されている。「スローな研究が多」かったと述懐されているが、一朝一夕に「解明」がすすむわけではない。

立命館大学赴任後、望月先生は京都市教育委員会の依頼で、特別支援学校の現場と連携されて障害のある子どもたちの対人援助の実験的・実践的研究に精力的に取り組まれた。京都市北総合支援学校学校運営協議会の委員長を 10 年近く務められてもいる。また、聴覚障害と知的障害をあわせもつ成人の言語行動獲得に関連する研究、重度の障害のある個人の選択決定の研究などにとりくんでこられた。そうした実験的・実践的経験から、「ノーマリゼーションの行動的展開」「行動的 QOL」「援助・援護・教授という対人援助の機能分析」などの研究をすすめてこられた。大学と地域の連携をすすめられた功績は大きい。

望月先生は、応用行動分析学を基点に対人援助学の構想を展望され、対人援助学会の設立（2009 年）とその後の発展に大いに貢献された。晩年、ご病気による退任まで学会理事長も務めてくださった。望月先生たちと育ててきた対人援助学の種が開花することを願っている。

望月昭先生の言葉はあとからきいてくる

高山仁志（立命館大学人間科学研究科）

私をはじめ望月先生の話聞いたのは、2007年に聴講生として望月先生の授業を受けたときでした。当時の私はドッグトレーナーとして仕事をしながら、ぼんやりと大学で行動分析学を学ぶことを考えていました。その授業で先生がおっしゃった「行動分析はさ、行動を変えることについては行きついちゃってるんだよね。じゃあ、次に何を変えるかっていったら、社会だよ」の一言に衝撃を受け、社会人学生として立命館大学に入学しました。入学後はしょっちゅう先生の研究室に押しかけ、たくさんのお話を聞かせていただきました。

それらのたくさんのお話の中で、自分の芯になっている言葉があります。

「シェイピングで相手を丸め込もうとするんじゃない」

「再帰的に問うことが大事なんだ」が、先生の口癖でした。先生の言葉は5年ぐらい経ってから「そういうことだったのか」となることが多く、当時も「再帰的に～」の意味がよくわかっていませんでした。しかし、「相手を丸め込むな」の一言で、一気に腑に落ちたのです。それは、「君の実践で、イヌは幸せになるのか?」、「誰のため、なんのための実践なんだ?」という問いでした。後年、「あの一言でぼくの芯ができました」とお伝えしたら、「それは悪いことしちゃったなあ」と嬉しそうにお話をされていました。

「行動分析に何が必要かを、分析的に探索してください。キーワードは“実践的”」が、最後に直接頂戴した言葉でした。この言葉をもらってから、今年で5年になります。そろそろ、きいてくる頃でしょうか。

現在、私は博士課程でヒトと動物のQOL向上を研究しています。「君には期待してるんだよ」と望月先生に言われたことが、私が博士課程に進んだ理由のひとつです。「すっかり先生に丸め込まれて、博士までいっちゃいました」といつかお伝えすることができたら、「それは悪いことしちゃったなあ」と、また悪戯っぽく言ってくれるかもしれません。

思い出に生きる望月昭先生

立命館大学 衣笠リサーチオフィス 橋本名津雄

思い起こせば、望月先生がおられた応用人間科学研究科の事務室に、私が配属されたのは、10年以上も前になる。それから、いくつかの部署を渡り歩いてはいるが、そこは、私が課長、事務長になってはじめて配属された部署であり、何もかもがはじめてで私にとっても思い出深い部署である。

応用人間科学研究科には心理系の先生が多く、全体としてはやさしく控えめな先生が多いような印象を当時もっていたが、望月先生は外向的でいつも元気におしゃべりされていたイメージがある。望月先生が、事務室に来られて、ソファで陽気におしゃべりされていた姿が今でも思い出される。

そして、今も良く思い出すが、望月先生が自分の学生時代の博士論文を自嘲気味におっしゃっていた点である。昔の自分の論文を読むと恥ずかしいとおっしゃっていた。それから、何年か後に、機会あって大学から補助をいただき博士論文を書いていたが、書けば書くほど稚拙でどうにもならない状況になった。行き詰ったとき、励まされたのが、当時の望月先生の言葉であった。「そんなものかな。」と思い、無事に博士論文を書くことができた。通過すると、だいたい皆さん、同じような感じで乗り越えてきたこともわかってきた。

わいわいしゃべりながら、臆せず、フランクに自分のこともしゃべってくれる。そうしたことをもって、人を優しく包んでくれる、そういった優しさがあったような気がする。

望月先生に宛てて

立命館大学人間科学研究所 元事務局 荒堀弓子
(現所属 Fruitfulness 株式会社 代表取締役)

望月先生、

私が、立命館大学人間科学研究所（人間研）の事務局を担当することになって、先生に初めてお会いしたのは2005年4月でした。そのとき所長だった先生から、人間研は「出会い系なんだぜ」と言われ、「なんかあやし〜い」と思いました。ふたを開けてみれば、“望月先生と愉快的な人間研のなかまたち”とほんとうに愉快で怒濤の日々を送ることになりました。

あの頃の人間研は、文部科学省の研究費獲得、生存学研究センター（現生存学研究所）の設立などなど、次々と活発な研究活動が繰り広げられていました。間違いなく、その当時のリサーチオフィスが担当する研究所・研究センターの事務局の中で、1位2位を争う多忙な事務局でした。そして他の事務局から「人間研さんはいいよね〜」とよく言われていました（たぶんこれは1番）。望月先生がおもしろくてキャラが立っていて、他の事務局や職員とも交流（ムダ話し）したりしてわちゃわちゃ。またそこに他の先生もやって来て、おやつを食べたりしてさらにわちゃわちゃしている。そんな風景が人間研の日常で、“いつもたのしそう”というのが主な理由でした。

先生とは、食べものの話（おやつ、ごちそう、なんでもござれ）、音楽の話、車の話、文化の話、映画の話、心の話といろんなことを、仕事の合間に話したり、おいしいものを食べながら話したり。いっぱいしゃべりましたねえ。先生とお話したことは、そのときの私にとっても今のわたしにとっても、なんとも表現が難しいのですが、ずっと大切なことです。もしかしたら今のわたしの方が、貴重だなあとじんわり感じる人が多いです。

今回、改めて先生と過ごした時間をたどってみたら、鮮やかにあの時間を体感することができました。これからも大事にしていきます。

望月先生、ありがとうございました。ではまた。

あらほりより

京都のお父さん

行動・教育コンサルティング 鈴木史織

以下本文

私は、大学院進学にあたって、望月先生の下で学びたい！と思い、応用人間科学研究科に入学しました。修士論文をご指導いただいた他に、学生ジョブコーチのプロジェクトにも参加させていただきました。そして修了後3年ほど研究科の実験実習相談室に勤務しましたので、その間もお世話になりました。その後現在の勤務先に転職し、その転職の際にも推薦状を描いていただき、それからもたまたま衣笠キャンパスに行くことがあれば、研究室に顔を出したり、先生が定年で退職される際には研究室の片付けのお手伝いをしたりもしました（最後、この部屋でこんなに床が見えるなんて！と達成感がありました）。大学院入学以降、お世話になりっぱなしでした。

正直なところ、優秀な学生だったとはいえませんが、先生には随分可愛がっていただいたと思います。バカな子ほど可愛い、の論理だったかもしれません。「京都のお父さんだからな」と言っていただき、実際結婚の報告に行ったときには「相手はどこ馬の骨だ」など、実の父でも言わなかったようなことを言われました。

修論を指導していただくとき、プロジェクトのミーティングの時の話、そしていろんな雑談の時に聞いた話、ちゃんと全て理解できているとは言えませんが、私の今の糧になっています。よく覚えているのは「楽しくなければやらない・続かない」という話です。今の仕事でも「楽しく」というのは重要なのですが、最初のうちはなかなか慣れず難しかったです。やっと少しは慣れてきた、くらいにはなったと思います。そして仕事以外でも、私自身の子どもや自分自身のことでも「楽しく」続けられるようにできているか？と、時々考えるようにしています。

今後も先生から学んだことを私なりに、仕事でも、他のところでも活かしていけたらと思います。そしてこれからも先生から学ばせていただくことがたくさんあると思います。

望月先生、ありがとうございます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

望月昭先生の研究室

立命館大学 名誉教授 藤 健一

望月昭さんが立命館大学文学部に着任されたのは1998年4月のことだった。心理学の室伏靖子教授が定年によりご退職となって、望月さんはその後任として心理学研究室に加わった。私は、望月さんのことは、前々から学会などに関わって知る機会があった。望月さんは、衣笠の教員研究室棟の2階の奥まった南側の明るい一室に、収まった。私の研究室は廊下を隔ててすぐ近くにあったので、様子を覗いてみたら、前任の愛知県コロニーの同僚二人が一生懸命、パソコンかなにかをセットしていた。数年後、望月さんは文学研究科から新設の応用人間科学研究科に移った。研究科が違ってくると、なんとはなしにやり取りも間遠になっていったように思う。そうはいつでも、帰りがけに望月さんの部屋の明かりがついていれば、少し顔を出した。着任した頃のすっきりした部屋とは異なって、ファイルやら資料やらが無秩序に重なっていた。そんな書棚の隅に、自動車の模型が飾ってあった。場違いな感じがしたので、いろいろと聞いているうちに、望月さんもかつては模型少年だったことが分かった。私も、昭和30年代の模型少年だったので、それ以降は随分と模型談義に花を咲かせた。心理学専攻には当時から動物実験室があった。その頃、私は何を考えたか、展示用にその動物実験室の建築模型を作ってやろうと思い立った。施設課からもらった図面に基づいて、縮尺25分の1で製作した。部屋の中の机や椅子、飼育ケージや装置もそれぞれ25分の1で作った。動物実験室ではハトを飼育していたので、模型の実験室にもハトがいた方がよかろうと思い、樹脂粘土で2cm足らずの白い小さなハトをいくつか作って、模型の飼育室の棚に並べた。今でも粘土のハトが8羽、静かに並んでいるけれども、そのうちの1羽は、望月さんが作ってくれたハトだった。心持、大きかったように思う。今は、その動物実験室の模型は、総合心理学部で展示されている。私は、その動物実験室の粘土のハトを見ると、元気だったころの望月さんを思い出す。20年以上たった今、果たして粘土のハトは望月さんのことを覚えているだろうか。

望月昭先生を偲んで

立命館大学 総合心理学部 星野祐司

望月先生に最初にお会いしたのは文学部心理学専攻の教員公募に応じてこられた先生の面接のときでした。1998年に着任されましたので、その前年だと思います。熱弁を振るわれた望月先生に、私は「徹底的行動主義」とは何ですかと質問したのです。私はそれまでその言葉を聞いたことがなく、「徹底的」という口語的な響きに興味を持ったのです。

望月先生とは専門分野が異なりましたが、なぜか気が合い一緒に夕飯などを食べに行ったり、二人とも遅くまで研究室にいたることが多かったのではしばしばお邪魔して雑談したりしていました。ある日、衣笠キャンパス付近のレストランで一緒に夕飯をとっていると、窓際でしたので、ちょうど通りがかった何人かの親しい大学院生に目撃されてしまいました。しかも二人でペアセットなるメニューを食べているところでしたので、我ながらおかしい光景だったと思います。また、あるとき、すでに料理は出されていたのですが、店主が注文を間違えたので新たに作り直しますということで、結局二人でそれぞれ二食分をいただいたことがありました。話し込んでいたので実は何を注文したのかを忘れていて、注文が異なることに二人とも気づいていませんでした。

望月先生とは遊んでばかりいたわけではなく、共同研究を行ったこともあります。介護方法を選択できる状況で人的介護と機器による介護を比較する研究でした。その研究に参加していた大学院生は工学部の研究室に最近所属して関連する研究を進めているようです。

さて、徹底的行動主義ですが、改めて調べてみると、スキナーの考えにも間違いがあると指摘する研究者がいることがわかりました。望月先生はご存知でしたでしょうか。思考や感情などのような私的出来事が観察可能な公的出来事の原因になることを認めたことはの大きな間違いであるとありました。私が専門とする学はその私的出来事について研究しているといえそう私的出来事には外界のいづらか先の予測とか変化の分節などを含んでいて、そのような私的出来事を共有する会が成り立っているように思うのですが、確かに、意がただちに行動の原因であるとするのは素朴な誤りともいれません。そうですね、望月先生。



スキナー
認知心理
ですが、私
化や省略
ことで社
識や思考
いえるか

望月昭先生との握手

一橋大学職員 片山詩朗

(元 立命館大学人間科学研究所事務局担当職員)

大学職員として3大学・通算10年も勤めていると、教員と悲喜を分かち合った経験は山ほどあるが、それでも教員との握手は滅多にない。数少ない記憶の1つが、望月昭先生がご退職される間に研究室で交わしたものである。

預かりものを返すという名目で、研究室の撤収作業中の先生のところへお邪魔したのだったが、その時、私は印刷を目前に控えた、ある刊行物の最終校正原稿を引っ越しのお荷物に加えてしまった。『インクルーシブ社会研究』第15号¹は、望月先生が7年(7年も!)所長を務められた立命館大学人間科学研究所の刊行物で、大型研究シンポジウムの文字起しを元にした記録冊子である。とある事情で外部評価委員を招いて行われた(つまりプロジェクトの評価に関わる非常に重要な)シンポジウムだったが、望月先生はこのシンポジウム中、記録冊子で残っている限り、少なくとも20回、その名前を呼ばれている(当日は壇上にもフロアにもいなかったのに、である)。「望月先生の連鎖モデルを借りますと…」 「(立命館大学の)研究倫理指針を作った…その中心的人物が望月先生」「色々と語っていただくのに一番適切な方は望月昭先生…(だが欠席)」といった引用のされ方が、望月先生の大学や学術界への御貢献を物語っていると言えよう。

そういったことを話しながら最終原稿を手渡すと、望月先生は照れくさそうに「全部タツヤや中村さん²がやってくれたことだから」と謙遜され、そして握手をしてくださった。震えていたが、大きく、温かい掌だったのを覚えている。 合掌。

¹ 稲葉光行(編)(2016) *インクルーシブ社会研究*. 15. *インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究*. 立命館大学人間科学研究所発行. <https://www.ritsumeihuman.com/publication/publication902/publication1039/> (2022/2/18 取得)

² サトウタツヤ教授(現:立命館大学総合心理学部)、中村正教授(現:立命館大学産業社会学部)。

望月昭先生を偲んで

立命館大学 契約課 長谷川敏子

望月先生と初めてお会いしたのは、私が総務課から独立研究科事務室（当時）へ異動になり、応用人間科学研究科担当となった2008年秋のことでした。もう10年以上も前です。

望月先生の第一印象=怖そう…。異動したばかりの頃、確か、修士論文の英文アブストラクトの導入について研究科会議での議論の最中、準備がすすんでいないと厳しいお叱りを受けてしまい、それまでの経過のわからぬ私は正直「とんでもないところに来てしまった…」と思ったものでした。

望月先生のその後の印象=対人援助学に熱い。事前に参考図書や文献を提示する入試改革は、望月先生の発案でした。「選抜から育成へ」「受験勉強をしたくなる試験システム」へと先生が熱く語っておられたのも印象に残っています。少しでも受験準備の目標設定が明確になるように、受験勉強の過程が大学院進学後の対人援助の勉学・研究・実践に対する実質的な助走となるように、ということだったと思います。応用人間科学科とは、多様な専門領域の先生方が「対人援助」という言葉のもとでは団結できる不思議な研究科でした。「対人援助」という言葉は、いまでこそ新聞やメディアで一般的にきく機会も増えましたが、望月先生をはじめ、研究科に所属する先生方の「新しい学問領域を作っていくぞ」という気概が感じられる場所でした。

2012年春に教職教育課に異動になってからも、キャンパス内で何度か望月先生にばったりお会いする機会があり、その都度「元気にやってる？」とお声をかけていただいたことが懐かしいです。その後、体調を崩されたことは聞いていたのですが…。

最後に、先生にひとつ白状しなければなりません。先生に面と向かって言ったことはありませんが、望月先生のことを事務室内ではみんなで「もっちー」と親しみを込めて呼んでいました。ときに厳しいことや頭の痛いことをおっしゃることもありましたが、一方でとてもおちゃめなところがある先生でした。改めてお礼を言わせてください。もっちー先生、ありがとうございました。

望月昭先生の思い出

立命館大学 総合心理学部 矢藤 優子

私が立命館大学文学部心理学専攻に准教授として着任したのは2007年、その時望月先生は人間科学研究所の所長をしておられたのでとにかくお忙しそうで、いつもエネルギーが満ち溢れていました。個人研究室がお隣同士だったのですが、研究室の壁が薄いので電話で密談する先生の大きな声はよく通りました。廊下の遠くからどすんどすと走ってくる音が良く聞こえたので、望月先生が研究室に戻ってこられるときはすぐにわかりました。夜遅くまで研究室に居残っていると、隣から時折どん、どんと大きな音がしたので、「望月先生は夜中に研究室の様態替えをしている」と思い込んでいました。何をしていたのかはいまだに不明です。

先生はいつも、年の離れた新任の私に親切に、いろいろなことを教えてくださいました。立命館大学の学生のこと、教員のこと、立命館大学ですべきこと、頼まれてもしなくていいこと。夜中まで研究室に残っていると門が閉まって出られなくなるから気を付けること。そんなときに便利な、乗り越えやすいフェンスの場所のこと。

もちろんまじめな話もしました。当時は研究倫理規定の整備にご尽力されていた時期だったので、母校である慶應義塾大学の先例についても触れながら「これは、べからず集ではなくて、研究者を守るためのものなんだよ」と何度も熱く語ってくださいました。今の研究倫理審査の体制を、先生ならどんな風にご覧になるだろう、と思うことがあります。

先生がご自宅で療養されていると聞いてからは、いちどお見舞いに行きたいと周りの人たちをしきりに誘ったのですが、全員が全員、元気なころの望月先生を思い出に残しておきなさい、といって会いに行くことに賛成しませんでした。だから今でも私の記憶の中の先生はどすんどすんとにぎやかで、今でも研究室にいと「何も用事はないんだけどね」なんてはにかみながらふらりと遊びに来そうな気がするので。

望月昭先生の思い出

立命館大学 保健課長 嶋津 雅彦

望月先生の訃報に接し、あらためて先生の生前のご様子を思い出しておりました。

初めて接したのは、2002年のことかと思います。当時、事務体制再編で大学院課が「大学院教学推進課」と「独立研究科事務室」の二課に再編され、私がちょうど大学院教学推進課に移動になったタイミングのことでした。応用人間科学研究科（現・人間科学研究科）が立ち上がって間もないころで、研究科設置のプロセスでのご苦勞を、当時の大学院部長・國廣先生から伺っており、そのエピソードに登場したのが初代研究科長の望月先生だったと記憶しております。

それ以前には、お仕事での接点はなかったものですから、「どんな先生だろう？」と思っておりました。お目にかかってお話を伺うと、お話し声は低音の魅力といますか、落ち着いた雰囲気とお声とが、とてもマッチした方だというのが印象に残っております。それに加えて腰の低い先生で、職場でお目にかかっても事務職員の私たちのことをとても大切にしてくださっていたことを覚えております。

のちに、私は独立研究科事務室に事務長として異動になり、先生と一緒に仕事をさせていただく機会に恵まれました。講義で接する機会はありませんでしたが、事務室や教授会などでやり取りをしたときに、先生は常に落ち着いた佇まいでおられ、感情をあらわにするようなお姿を拝見することはけっしてありませんでした。むしろ、人が楽しく和やかに過ごせるようにと大層気を遣っておられるようにも感じておりました。誤解を恐れずに書かせていただくとすれば、「お茶目」な部分を常に持ち合わせておられたと感じています。

ただひとつ心配をしていましたのは、先生のお顔色のことです。お別れをするにはお若い先生でした。おそらく、まだまだやり残したこともおありだったでしょう。

お別れの会には、先生のお写真が飾られることと思います。きっと目の周りには皺が深く刻まれていることと思いますが、それは先生の深い優しさそのものの表れだと思っています。そのお姿を、いつまでも記憶にとどめて歩んでまいりたいと思います。